

山之口 獾 やまのぐち ばく

山之口 獾（本名、重三郎じゅうさぶろう）は、明治36（1903）年、
沖縄県那覇に生まれました。文学や美術に傾倒し、様々な職
業を転々としました。わかりやすい言葉で表現した詩が特徴
で、庶民感覚豊かな作品を残しています。昭和38（196
3）年に亡くなりました。

鼻 はな

その鼻はながいいのだ と答こたえたところ
鼻はなはあわてて 掌てのひらに身みをかくした

満員電車 まんいんでんしゃ

爪先立つまさきだちの
靴くつがぼやいて言いった
踏ふんづけられまいとすればだ
踏ふんづけけないでは
いられないのだが

畳 たたみ

なんにもなかつた畳のうへに

いろいろな物があらはれた

まるでこの世のいろんな姿の文字どもが

声をかぎりに詩を呼び廻つて

白紙のうへにあらはれて来たやうに

血の出るやうな声を張りあげては

結婚生活を呼び呼びして

をつとになつた僕があらはれた

女房になつた女があらはれた

桐の箆筒があらはれた

薬罐と

火鉢と

鏡台があらはれた

お鍋や

食器が

あらはれた

がんとん ふうけい
元日の風景

しょうがつさんがにち
正月三カ日はどこでも

あさ そうに
朝はお雑煮を

いただくもので

しき
仕来たりなんじやありませんか

にようばつ い
女房はそう言いながら

そうに
雑煮とやらの

しき
仕来たりをたべているのだ

ぼくはだまって

みそしる
味噌汁のおかわりをしたのだが

しょうがつ しき
正月も仕来たりもないもので

みそしる あさ
味噌汁ぬきの朝なんぞ

く
食ったみたいな

かん
感じがしないのだ

【参考資料】

『日本の詩歌 第20』(中央公論社)

『日本語を味わう名詩入門 14 山之口獏』(あすなる書房)

『山之口獏詩文集』(講談社文芸文庫)